Final FantasyⅦ　歴史の音色、星の詩

本多忠明

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タークスのシェーン・アンライバルドはある日突然５３０年後の世界に飛ばされる。

元の時代に戻る方法を探すために、この時代で出来た仲間たちと共に旅をする。

しかし次第に星の命運を係わる戦いに巻き込まれると同時に己の出生の秘密も知っていくようになる……。

※後で誤字脱字など気づいて改定されている場合もあります。

目次

序話　ジェノバ戦役と遠い未来　――　1
第一話　シェーンとジェルミナル　8
第三話　カームまでの道中　――　19

序話　ジェノバ戦役と遠い未来

以前この星には星の命をかけた大きな戦いが起きたご存知だろうか……。

己の真実を知り、星を壊し自ら神になろうとした〝英雄〟とそれを阻止しようと戦った者達がいた……。

何らかの理由で偶然共に行動するようになった〝彼ら〟である……。

出会いと別れを繰り返しながらやがて〝彼ら〟の旅は星の命運をかけるものへと変わった……。

〝英雄〟は破壊魔法を使って星を壊そうとしたのに対し、〝彼ら〟の仲間の一人が自らの命と引き換えに究極の白魔法を唱え星を守ろうとした……。

〝彼ら〟は〝英雄〟に戦いに挑み、そして勝った……。

星自身も彼らの活躍を見ていたのだろう……。

〝彼ら〟に答えるのかそれとも自らを守るために破壊魔法を究極の白魔法と協力して打ち勝った……。

これは現代（いま）では親から子、子から孫までに語りづかれる誰でも知っている御伽噺である。

長い年月が〝彼ら〟を神格化させ、多くの人々は一度は〝彼ら〟に憧れを抱くほど〝彼ら〟の活躍はもはや遠い昔の出来事となっている……。

そんな〝彼ら〟の事は『ジェノバ戦役の英雄』、破壊魔法を使って星を壊そうとしたのを『メテオ災害』と呼ばれ、演劇の題材になったり歴史学者が研究テーマにするほど有名な歴史の出来事の一つだ……。

平和な時代の今、人々は知らない……新たな星の危機が訪れかけていることを……。

そしてそれを救う鍵を握るのは過去からやってきた一人の人物の事を……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

鋼の肉体を持った夕日のような皮膚と赤い鬣を持った大型の獣が、自分によく似た二頭の獣を連れて力強い走りで大地を駆けていく。

大型の獣はナナキといい、『ジェノバ戦役の英雄』の一人いや一頭である。

ジェノバ戦役の英雄は、今では人間よりはるかな長寿の持ち主である『星を守りし一族』通称『護星獣』と呼ばれるナナキと肉体を改造され魔獣に変身する能力と望まれぬ不老不死を手に入れたヴィンセント・ヴァレンタインだけとなっていた。

今ナナキは、ヴィンセントと交わした一年に一度会いに行くという約束を果たすため

に走っている。
一緒についてきている彼に似た獣は彼の孫達であった。
彼は同族のディネと結ばれて五頭の娘に恵まれた。
長女のウリウリ。
次女のハレアカラ。
三女のマヒナ。
四女のリコ。
五女のアパパネ。
そのうち行方不明となった末娘アパパネ以外はそれぞれ伴侶を得ていて、子宝にも恵まれていた。
娘達が幼い頃にもナナキは、ヴィンセントの元に連れて行った。
彼女らが母になり我が子に父に連れられ年に一度ヴィンセントに会いに行った思い出を話しているうちに、次第に孫達も「自分たちも会いに行きたい」とナナキに訴えたのである。
さすがで全員連れて行ける事は出来ないので、それぞれの子供をローテーションする事で納得させたのであった。
今年は今は亡き長女夫婦の子供を連れて来ている。

一頭はナナキとあまり変わらない体格の持ち主で一歩後ろの位置で走っている。
もう一頭は全身の毛色が黒で見た目が完全に子犬が二頭に引き離されないよう一生懸命に走っている。
前者はラニ。後者はハウオリ。
二頭は兄妹である。
この兄妹は両親の死後、祖父母であるナナキとディネが親代わりとなって面倒見ている。
ラニはともかくハウオリは付いていくのに必死なので、ナナキはなるべく幼い孫娘が付いていけるペースに調節して駆け抜けるのであった。
「ハウオリ、大丈夫か」
ラニは振り向いて声をかける。
「……大丈夫だよ。おじいちゃんまだつかないの？」
「もう少しだ」
前を向いたまま走るナナキは答えた。チラッと後ろを覗き、付いて行くのがやっとのハウオリを見て（やっぱり留守番させるべきだったかなぁ）と思っていた。
人間の年齢で言えば１７歳のラニはともかく、人間の年齢で言えば５歳児のハウオリには厳しいようだ。

本来ならもう少し成長してから連れて行くべきだったが、ハウオリが「留守番嫌だ」「自分も行く」と駄々をこねたのである。

実は以前、この仔らの叔母であるアパパネも今のハウオリぐらいの頃にこれとまったく同じ事をしたのだ。その時は強制的に留守番させたのであった……。

しかし、根っからのじゃじゃ馬であった彼女は大人しくするはずもなくナナキ達の後をコッソリと付いてきたのだ。

彼が気が付いた時にはすでに遠くまで来てしまっていて、幼獣一頭で帰れる状況ではなかったので仕方がなく連れて行ったのであった。

因みにアパパネは帰った時にディネから大目玉を食らっていたのもナナキは昨日の事のように覚えている……。

それ以降ナナキは希望をする仔はなるべく連れて行くようにしている。

「最後の難関が見えていたぞ。二頭(ふたり)とも準備はいいか?」

「祖父(じい)ちゃんっ!俺はいつでも大丈夫」

「ハーもやってみる」

最後の難関とは目の前に見えてきた断崖絶壁の事。

何度も通っているナナキは軽々と崖を登っていく。

9年前から故郷のコスモキャニオンを出て世界中を旅をしているラニもまた同様。

問題はハウオリの方だ。
彼女はこの土地に来るのは今日が生まれて初めて。
上手くできるか心配だったがそれは杞憂に終わった。
小さな体で何とか彼らのやる事を上手く真似て通って行った足場を跳躍して進んで行く事が出来た。
頂上に着いたナナキはとっくに目的地に着いているのであろうヴィンセントに、自分が来た事を知らせる合図をやろうと天に向かって咆哮をしようとしたそのときだった。
突然左側の方でナナキ達は異変を感じて振り向いた。
目が開けられないくらい複数の強い緑色の光の帯が何処となく集まってきた。
光の帯は一箇所に集まって一つの球体へと変化した。
「なっ、何だよあれっ!?」
「おじいちゃんっ！」
ラニは目の前の不可解な現象に驚き、ハウオリはナナキの背後に隠れた。
ナナキは一歩前に出て唸り声上げながら最大級の警戒心を高めた。
球体の光の色が緑から白へと変わっていき、やがてそれは徐々に人の形へと変わっていった。
栗毛色の短髪に幼さが残る顔には黒縁の丸眼鏡。

十五ぐらいの少年の姿には不釣合いな黒いスーツを纏い、腰には左右それどれ短剣が収められていた。

そして腕には何かを抱きかかえていた。

突然現れた彼はゆっくりと眼を開けた。目の色はとても綺麗な緑色でナナキの脳裏にはかつて敵の手にかかって命を落とした一人の女性が脳裏によぎり、自然と警戒を解いていた……。

「?……あれはミッドガル……だよな……なんであんな風に……」

彼は目の前の絶景に何か信じられない気持ちで頭が追いついていなかった……。

第一話　シェーンとジェルミナル

突然の出来事にただ驚いていた少年だったが自分以外にも気配を感じた方に振り向いた。

そこには右目に傷があるものとまだ若いとされるものと彼らの背後に隠れる幼獣の三頭の護星獣。

少年は彼らを、正確には彼らの一族のものの一頭を知っている。

「……セトさん……？」

その言葉を聴いてナナキはハッとした。

聞き覚えがあるのは当然だ。

〝セト〟はナナキの父親の名前である。

「わーっ、セトさん久しぶりっ！」

少年はナナキ達に駆け寄って見えやすいようにしゃがんだ。

彼のほうはナナキ達は自分の敵じゃないと分かっており、腰の短剣を抜く気もなく殺気も感じさせてない。

しゃがんだ事でナナキは初めて彼の腕にあるものが何かが分かった。

スヤスヤと眠っている赤子。
見ているだけで穏やかになる。
しかし、ナナキは何故かその赤子に懐かしさを感じた。
「ん……セトさん？」
少年は首を傾げた。
どうやら彼は自分を父と間違えているとナナキには分かっていた。
「ちょっと待ってくれっ！それっ、曾祖父ちゃんの名前だよ、祖父ちゃんの名前はナナキだっ！」
ナナキをセトと間違えている少年に目の前の状況を追い付いてないラニは思わず訂正させた。
「ひいじいちゃんっ!?……ナナキ!?」
ラニの言葉に少年は頭が冷静になってナナキをよく見てみた。
「君は……セトさん……じゃないのかい……？」
「セトは父さんの名前だよ。おいらは息子のナナキ」
少年の質問に答えたナナキとの静かな間が流れた後絶叫が当たり一面に木霊した。
「ええぇ～～～～～～っ!!あのナナキ君っ!?」
とても現在の状況に思考が追いつかない少年。

何故なら彼が知っているナナキとは年齢の計算が合わないのだ。
護星獣は遅老長寿であり、人間で言う一つ年を取るには三年分必要だと言われている。
ナナキが彼と会ったのは6歳の頃である。
その頃のナナキは人間に例えると2歳にあたる。
当然彼の事は知らない。
しかし彼がナナキと会ったのは二十年前の事であるので、彼の中ではナナキの今の年齢は２６歳。人間で言えばまだ８，９歳でなければおかしいのである。
だから目の前の成獣がナナキだと言われても、しかもそのナナキが祖父ちゃん呼ばわりされているのを見てもとても信じられないので思わず絶叫したのである。
「わあぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！」
彼が大声を出したせいで、赤子が起きてしまった。
「!!?よしよし、ごめんね、ごめんねっ!!」
立ち上がった急いで赤子をあやす少年。笑顔で話しかけたり、全然得意ではない歌を歌ったりしているが全く効果がなし。
そもそも彼自身子供がいるどころか未婚の身であるうえ、仕事の関係で子供と接する機会が全く言っていいほどないのであった。

もはやお手上げ状態。八方塞とはこの事だ。
そんな時、ナナキの後ろに隠れて様子を見ていたハウオリがトコトコと出てきて彼の前までやってきた。
「……おうた……歌ってあげるね。」
深呼吸したハウオリが歌を歌い始めた。
祖母であるディネから教わった歌である。
彼にとっては初めて聞く歌。
だけどとても心地がよい。
あたり一面の空気が澄んでいくような感覚だ。
歌が歌い終わるといつの間にか赤子は眠ってしまった。
「ありがとう。おかげで助かった」
優しい眼差しで頭を撫でた。ハウオリの方も頭をクシャクシャにされても嫌な気分じゃない。むしろ喜んでいる。
次に顎下を撫でてあげると今度自分から擦り寄ってきた。
そんな光景を見ていたナナキとラニは驚いた。
「あの人見知りが激しいハウオリが初対面の人間に懐くなんて……」
「……おいらも始めて見た……人間に体に触れられるだけでも嫌がるのに……」

ナナキとラニなんかお構いなしにハウオリはすっかり少年に心を開いていた。
「ハーはね、ハウオリってゆうの。後ろにいるのがハーのおじいちゃんとお兄ちゃん。お兄ちゃんの名前はラニってゆうの」
「君がハウオリちゃんでナナキ君とラニ君か」
それぞれを一頭一頭名前を確認するようにじっくりと見渡して口を開いた。
「ハウオリちゃんが自己紹介してくれたから僕も自己紹介させてもらうよ。僕はシェーン・アンライバルド。神羅製作所、あっ……今はこのネーミングじゃなった。神羅電気動力株式会社通称神羅カンパニーの総務部調査課に所属している者だよ」
（神羅カンパニーの総務部調査課!?タークスじゃないか!?）
ナナキとラニが目の前の少年――シェーンの言葉に愕然とした。
ナナキは神羅カンパニーの総務部調査課を知っている。別名タークスと呼ばれた特殊部隊で情報収集や護衛などの表の仕事から暗殺やスパイなどの裏の仕事を請け負っている。また、神羅カンパニーの暗部を担当するためタークスは死ぬこと以外では辞める事は出来ない。シェーンが着ている黒のスーツはその証であるため、彼が嘘を言っている様子ではない事が分かる。
余談であるがナナキはタークスにはあまりいい思い出を持っていない。だけど嘗て共に戦ったジェノバ戦役の英雄にはタークスだった者がいたのは事実。

一方ラニの方は別の言葉に衝撃を受けた。
「神羅カンパニーっ!?総務部調査課と言うものは何のことが分からないけど神羅カンパニーという会社はとっくの昔になくなっているよ」
「えっ!?それってどうゆう事なのラニ君……」
訊ねようとしたシェーンはハッと先ほどの光景を思い出して、崖の先の絶景を改めて見た。
深い緑に追われたミッドガル。
さらに詳しく見ようとジャケットのポケットからコンパクト双眼鏡を取り出して覗いた。
建物は所々朽ちており、あちらこちら木々や蔓が生い茂っている。そのうえモンスター達が我が物顔で歩き回っている。
シェーンは双眼鏡を外すと唖然としたのが誰の目を見ても分かる。
シェーンの知っているミッドガルは建設されて最低でも十年は立っているがまだ新しいと言える都市である。なのに今、目の前に見えているミッドガルは完全に遺跡化している。自分の記憶と真逆の現実に惚けてしまう。
「シェーンさん、シェーンさん」
重い空気に耐えられなくなったハウオリが声をかける。

「赤ちゃんの名前なんてゆうの？」
「そうだよっ！おれも赤ちゃんの名前がずっと気になっていたんだぁ」
ハウオリの話に合わせるようにラニも近寄ってきて話しかけた。
「……名前かぁ……」
自らの腕の中で穏やかに眠る赤子を見た。
（そういやぁ……名前を付けて貰ってないんだったなぁ……）
偶々（たまたま）自分と一緒に見知らぬ土地に飛ばされた生まれたばかりの赤子。両親といた時間は数時間にも満たなかったため名前を貰う暇すらなかった。
当然この子には名前がない。ないと赤子も自分達も不便。
どうしようと考え込んだ時にふとシェーンはある事を思い出した。今は亡き父ジョーダンとの会話である。
その会話の内容で彼は解決策を見出した。
「……ジェルミナル……」
「えっ!?」
「この子の名前はジェルミナル。ジェルミナルだ」
ラニとハウオリの見事なハモリにシェーン微笑んで答えた。
「何でジェルミナルって言う名前なんだ」

「ジェルミナルというのはね僕の父さんと母さんが考えた名前なんだ。僕が生まれる前の話なんだけど男の子だったらシェーン、女の子だったらジェルミナルという名前にするんだって決めていたんだって。僕が男だったからシェーンという名前にしたんだ。だけど子供は僕しか恵まれなかったから女の子用のジェルミナルをお蔵入りしてしまったんだ。この子には名前がなかったんだから両親が女の子用に取っていたジェルミナルをこの子にあげたんだよ。」

「シェーンが今付けた?」

「仕方がないよ。この子の親が名前を与える前だったんだから。僕にとっては『ジェルミナル』は僕の親が残した名前だから……この子にあげてもいいかなぁって」

ラニとハウオリは顔を合わせて納得した。二頭は年は離れているが仲は良好の兄妹。ラニは時々帰ってきては必ずと言っていいほどハウオリの遊び相手になっている。

「さてその赤子の名前も分かったことだし、ジェルミナルのために町に移動しようか」

彼らの会話が終わったのを見計らってナナキは声を掛けた。

もはや今のナナキにとってはヴィンセントに会う事よりもシェーンとジェルミナルの二人が最優先となっていた。

「どうしてだい?」

ナナキの言葉に疑問符を浮かべる。ハァとため息を出して全く気が付かないシェー

ンに何で町に行くと言ったか説明してやった。
「ミルクとおしめはどうするつもりなんだ……」
「!?しまった!!」
　シェーンは重大事項に今気がついた。手元にはオムツやミルクなんて持っていない。着の身着のままこの世界にやってきたんだからそんな物は持って来ていない。
　ハウオリのおかげで眠ってはいるけれども、もし今度泣き出した理由がはオムツやミルクの催促だったらどうする事も出来ない。
　町に行ってこれらの物を手に入れなければならないのだ。
「連れて行ってくれないか?」
「おいらの背中に乗って」
　ナナキはシェーンを乗せるために伏せてた。
「……乗っても大丈夫?」
「おいおいシェーン。祖父ちゃんはシェーンみたいな人間の子供を乗せるぐらいは朝飯前だぞ」
　ラニの言葉を聴いてシェーンは突然体を震えだした。降りるのは怖いのかなと思ったがそうではない。
　彼の体から怒りが満ちてきているのが分かった。

ラニは自分が地雷を踏んだ事には気が付いた。しかしそれが何かは分からない。
「ふざけんなっ!!僕は２６歳だっっ!!」
「「えーーー!!」」
ラニだけでなくナナキもハウオリも驚いた。
「身長も低いし、顔も童顔だって事は自分でも認めているよっ!!だけど正真正銘２６。とっくに成人を迎えている身さっ!!」
目を尖らせて自分は少年じゃないと言い放ったシェーン。彼は自分の見た目が幼いのでよく未成年と間違えられる事が嫌で嫌で仕方がないのである。そのため未成年扱いは彼の前では禁句であった。
「シェーンっ!悪かった悪かったって。もう二度と言わないっ!!」
鬼のような形相で睨み付けるシェーンは今にも掴み掛かりそうな雰囲気を醸し出しているので、ラニは慌てて誤った。その後、無言のまま踵を返した時のシェーンの背中が先ほどの精神的ダメージの大きさが分かるほど重い空気が漂っていた。
見てるだけで耐えられなかったラニは「本当にゴメン……」と言って心の底から反省した。
ナナキの背中に跨って乗ると「これでいいかい」と訊ねた。
首を回して確認すると縦に振った。

「シェーン。しっかりとおいらに捕まっていてね」
「分かった。でもジェルミナルが寝てるから安全運転で頼むよ」
会話を交わしてすぐに崖を降りて行き、ラニとハウオリもナナキに続きその場を後にした。

第三話　カームまでの道中

ナナキの背中に乗ったシェーンは久しぶりに心地よい風と豊かな大地の匂いを感じていた。

仕事柄血生臭い事と謀略と狡猾が当たり前の世界に生きてきたため澄んだ空気は彼を癒していく。

油断してしまうと眠ってしまい、ナナキの背中から落ちてしまいそうだ。

頭が落ち着くようになってきた時に、それと同時にさっき見たミッドガルの風景に疑問が湧き上がってきた。

どう見ても人が離れて十年、二十年どころじゃない。森の中に埋もれるには最低でも百年は必要。まだ幼獣であるナナキが成獣に成長していて、しかも孫までいる。もしかしてここは自分の知っているようで知らない世界なのか。

次々と浮かび上がってくる疑問に耐えられなくなりナナキに質問した。

「そういやぁ、なんでミッドガルがあんな風に遺跡化になっているんだ?」

「一番の原因は『メテオ災害』の仕業だからなんだ」

シェーンの知らない単語が出てきたので鸚鵡返しをした。

「メテオ災害？メテオ災害って何？」
「メテオ災害を知らないのかっ!?」
「知らないも何も始めて聞いたんだから」
　これにはラニとハウオリも反応した。何故ならメテオ災害は『ジェノバ戦役』に関わる重要なキーワードだからだ。誰もがジェノバ戦役の話は必ず一度は耳にした事があるので当然メテオ災害の事も知っている。まだ幼獣のハウオリでさえ知っている事なのにシェーンは全く知らないなんておかしいのである。
「……本当に知らないの……」
「知らないって。知っていたら耳に入っているし、本社のお膝元だから救助活動に借り出されているよ。けどそんな出来事は全くなかったんだ」
（どうゆう事……）
　嘘を付いている様にも見えないしその様子だと本当に知らないようだ。タークスであるのにメテオ災害を知らないなんてナナキの中で疑問が沸いたけれども、これ以上は話が平行線になりそうだったので一先ず置いといて、今度はこちらから質問した。
「ジェルミナルの両親は如何した？」
　ナナキの質問にシェーンは顔を俯いて沈黙した。しばらくして「……分からない……」と答えて、ポツリポツリと自分の気持ちを口に出していった。

「……あの人達にはいますぐにでも逃げて欲しい……自分達の楽観さが……自分自身の首を絞めているか……さっさと気づいて欲しい……一箇所での生活が……綱渡り状態だって事に……目を覚まして欲しい……逃げて逃げての生活してくれたほうが……まだ……マシかもしれない……」

自分の鬣を掴む手が強くなっているのを感じたナナキ。彼が感じている悲憤慷慨の悔しさがこちらにも伝わってきている。シェーンはここに来るまで一体何があったんだろうかと同情すら覚えた。

何かを思い返したらしく暫くはシェーンの無言が続いた。

無口となったシェーンに不思議に思ったハウオリが話しかけると苦笑した。

「シェーンさんはその人たちの無事を祈っているの？優しいんだね」

「優しいのかな……僕って。そうじゃないよ、ただあの人は取り返しの付かない過ちを犯したんだ。頭ではこれ以上攻めるなと分かっているけど心のほうがね……。だってそのせいで僕は八年もの間、大切な人をずっと探してるんだ。」

「大切な人？」

「うん……たった一人の家族なんだ。ある時僕の仕事の関係で偶然の再会してね、三ヶ月の間一緒に一つ屋根の下で暮らしていた」

「どうして三ヶ月なんだい？」

聞いていたラニがシェーンとハウオリの会話に挿んできた。
「僕の任務がね、三ヶ月と言う期限付きだったから。それ以降その人とは会ってないんだ。連絡はトップシークレットに関わっているためすることも出来ないし。でも僕にはその人のやっている事が最初っから嫌な予感でしかなかったんだ……。」
「嫌な予感？」
今度はナナキが聞いてきた。
「みんな変だったんだ……。まるで何かに取り付いて必死に完成させようとしていた……関係者は誰一人不気味な異様さに気づいていなかった……けど中にはそんなの関係ないと言わんばかりのやつもいたのも事実……。僕のたった一人の家族もそれに関わっていたんだ……。ただ……その人の場合は他にも事情があったみたいなんだ」
シェーンはその人の事情を分かっていたがあえて話さなかった。
「で、まともだったのが先輩だけだったんだ。あの時の僕にとってはただ一人尊敬と信頼が出来る人なんだ。先輩にその人の事をお願いしたんだけどたぶん失敗したんだと思うんだよな……。だけど三ヶ月の短い期間だからこれしか方法がなかったんだ。二年の月日が過ぎた時に唯一尊敬する先輩と同時期に死んだと伝えられてもどうしても信じられなかったんだ。その人に関連する情報なら小さな手がかりでも欲しくて会社に内緒で独自捜索していたのさ。ようやく当時の関係者の一人だったあの人の現代の

居場所が分かって話を聞くために仕事を抜け出して会いに行ったわけ。そしたらさ……家族を作っていたんだ。心の底から顔面を殴りたいと思った。でもやめた……殴っても元に戻るわけじゃないからね」

ハハハと乾いた笑い声がシェーンの口から出てきた。

「そんな話おいら達にしゃべっていいの？」

「ナナキ君達は口が固い気がするから。」

彼がナナキ達にこの話をする事に決めたのは己の利発さと勘と経験だけじゃない。決定的なのがあるカラクリを備わっていたからだ。

「安心しろ、俺は誰にも話さないぜ」

「ハーも。おじいちゃんは？」

「誰にも言わないよ、シェーン」

それを聞いてシェーンは「ありがとう」って礼を言って微笑んだ。

「あっ」

明るさを取り戻したシェーンは前方にあるものに気が付いた。

「あれがそうかい？」

「そうだ。あれはカームだ」

「ええ～～～～っ!?あれがカーム!?」

ナナキの言葉に驚くシェーン。なぜならカームは町が城壁に囲まれたほのぼのとした小さな町が彼が知っているカームの姿。

しかし目の前にあるカームと言われた町はそんな雰囲気はなく完全に大都市だったからだ。自分の知るカームとは似ても似つかぬ姿なのでパニックを起こしかけたが今はそれ所じゃない。

「ナナキ君悪いけどスピード上げてくれない？急いでジェルミナルのためにミルクとオムツをゲットしたい」

眠っているうちに買い物を済ませたいのはナナキも同じなのでそのリクエストに答えて走る速度を上げてカームに向かった。